

報道機関各位

み
く
ら
し
調
う、
み
や
ま
有
明。商工観光課 商工観光係
担当 中島
TEL 0944-64-1523

第18回「つきなみ旅」を開催

～ かいづおんたうえさい
海津御田植祭・早乙女の歌と季節の植物にふれる体験～

高田町海津に鎮座する筑後乃国阿蘇神社は、朝鮮の役に出兵した柳川藩家老・小野和泉守の命により社殿と神田が寄進され、元和8年(1622年)に現在の地へ分霊、新築されました。この時から、「御田植祭」が始まったとされ、神社の境内では、初春からの耕地、種まき、苗作り、早乙女による田植え、秋の収穫を喜ぶ様子までが神事として表現されます。

海津御田植祭は、神主をはじめ、田打男や早乙女などの役が参加し披露する、この地に伝わる独自の掛け合いの歌や田植歌が大きな見どころで、市の無形民俗文化財に指定されています。今回の体験を通して、いち早く春の訪れを感じてみませんか？

- 期 日 令和8年3月1日(日) プログラム開始13:15～
- 定 員 10名
- 参加費 2,500円
- 場 所 筑後乃国阿蘇神社
- 内 容 鐘や太鼓を打ち鳴らしながら座元から神社まで進む行列を観覧後、御田植祭についての説明を聞きます。その後、田の神を迎える巫女的な存在である早乙女に扮した子どもたちや氏子の田植え歌(奉納神事)を見学。その後、「雑木の庭武蔵野」で、春に芽吹く植物について話を聞きながら、自然に囲まれた空間でお茶をいただきます。
- 主 催 筑後乃国阿蘇神社
- 問い合わせ・申し込み
みやまブランディング推進委員会(TEL:64-1523 商工観光課内)

※「つきなみ」とは元来、月々おこなわれる「嘗(なめ)=収穫を祝いながら自然の神々との供食・食事会」のことであり、旧暦の時代に大切にされていた月のリズム(月波)を意味しています。





つきなみ旅エクスカージョンプログラム vol. 18

大陸から有明海を通じて稲作が伝わった、稲作伝承の地。
今年の田植えを始める前に、稲が無事に育ち、
豊かな実りが得られるよう祈るお祭り

御田植祭・早乙女の歌と 季節の植物にふれる体験

2026
3月1日
13:15 スタート
受付開始
13:00 -

参加費

2,500円

ケーキセット付「雑木の庭 武蔵野」

開催場所

筑後乃国阿蘇神社

みやま市高田町海津1642

催行者

筑後乃国阿蘇神社

ご予約
お問合せ

みやまブランディング
推進委員会
〒835-0023 みやま市瀬高町小川5
(みやま市商工観光課)

TEL 0944-64-1523

プログラム

「御田植祭・早乙女の歌と
季節の植物にふれる体験」
詳しくは裏面をご参照ください。



大陸から有明海を通じて稲作が伝わった、稲作伝承の地。今年の田植えを始める前に、稲が無事に育ち、豊かな実りが得られるよう祈るお祭り

「御田植祭・早乙女の歌と季節の植物にふれる体験」

高田町海津に鎮座する筑後乃国阿蘇神社は、朝鮮の役に出兵した柳川藩家老・小野和泉守の命により社殿と神田が寄進され、元和8年（1622年）に現在の地へ分霊、新築されました。この時から、御田植祭が始まったとされ、神社の境内では、初春からの耕地、種まき、苗作り、早乙女による田植え、秋の収穫を喜ぶ様子までを、神事として一連の流れで表現します。

大きな見どころは、神主をはじめ、田打男や早乙女などの役が参加し披露する、この地に伝わる独自の掛け合いの歌や田植歌です。

今回は、鐘や太鼓を打ち鳴らしながら進む座元から神社までの行列をご覧いただいた後、御田植祭についての説明をお聞きいただきます。その後、田の神を迎える巫女的存在である早乙女扮する子供達や氏子の皆さんによる独特の田植え歌（奉納神事）を見学します。その後、近くにある「雑木の庭武蔵野」で春の芽吹く植物について話を聞きながら、自然に囲まれた空間でお茶を楽しんでいただく体験です。

プログラム

13時00分 受付開始

13時15分 プログラム開始 行列が神社に到着後、御田植祭についての説明

独特の田植え歌（奉納神事）を見学

「雑木の庭 武蔵野」にてお話とティータイム

15時30分 アンケート記入・終了

開催日 令和8年3月1日（日）

時間 13時15分スタート（受付開始 13時00分より）

開催場所 筑後乃国阿蘇神社 みやま市高田町海津1642

参加料金 2500円 ケーキセット付「雑木の庭 武蔵野」

定員 定員10名（最少催行1名）



くらし調う、みやま有明。

つきなみ旅連載コラム vol.18

植物と共奏する文化の象徴「御田植祭り」

伊勢の磯部で、古来海産物を伊勢神宮に奉納してきた伊雑宮の海人たち。ここでおこなわれてきた日本を代表する御田植祭りは、約2千年前に始まったとされています。稲作漁労文明発祥の長江流域苗（ミャオ）族によって、稲作は有明文化圏にもたらされました。約2～3千年前に筑後川流域支流の宝満川に伝わり、そして矢部川流域や唐津の菜畑（なは、苗族の言葉で稲）遺跡などへと広がっていったのではと推測されています。（諸説あり）

みやまにおいても御田植祭りは古くから盛んに行なわれており、昭和34年日子神社の御田植祭りには、3万人の方が参加したと新聞の記事にありました。粥占いと共に、九州では大切なお祭りとしていたようです。ここでは、海津「御田植祭」や江浦八幡の「粥占御試祭」など、稲作にまつわる祭祀が盛んだったのですね。「早乙女のそでを連れ笠の端を並べ連れ勇み、田植えを急がん」と謳われる海津の田植え歌からも偲ばれるように、当時、山門・三瀦両郡から田植出稼の早乙女が、毎年一千五・六百名の多数が各地域の田植えを手伝い、男女の出会いの場としても「くらしを支え、調べてきた」ようですよ。



ブランディングアドバイザー

福井 隆

東京農工大学大学院客員教授
地域生存支援 LLP代表
「地域で生きる、希望をつくる」
事業化支援ファシリテーター

誇り高き地域の歴史と伝統

みやまの酒文化

みやま市は古代より他に先駆けて稲作が伝承された西九州有明文化圏にあり、五穀豊穡の祭事も多く、神社数も圧倒的に多い地域です。そして、神社の神事に欠かせないのが御神酒（おみき）、つまり『日本酒』です。瀬高だけでも江戸末期40数件の酒蔵があったのをご存知でしょうか？【一角・園の蝶・都の月・池泉・友瓢・喜久司・白亀・富貴鶴・澤の光・菊美人・瑞光・喜久栄・甘露・酔千両・千代錦・喜翁・・・】

矢部川水系の良質な米から造った地酒を、瀬高橋の港から有明海の海流を利用し、酒の三大消費地であった長崎の花街「丸山」に永く供給していました。船の運搬がなくなった後も、大牟田や筑豊などの炭鉱地にまで出荷され、瀬高は酒造りの街として有名でした。残念ながら時代の流れもあり、現在は数蔵となってしまいましたが、今年も高田町（舞鶴）の玉水酒造で3月8日（日）、瀬高町（上庄）菊美人酒造では3月14日（土）・15日（日）に蔵開きが開催されます。地元の米を用い本来の地酒を造る、郷土の誇りのお酒です。

